こんなところに市民憲章

1．富士山のように　強く正しく
きまりを守り
平和で安全な社会をつくります

無事故を祈って

「おはようございます。ちょっと待っててね。車が来るから」。小学生1人1人に声をかけながら、雨の日の今日も、平垣町の荻野祥吉さんは、自宅近くの「札の辻橋」の交差点に立ちます。

毎朝6時半には家を出て、この道を通る子供たちすべてが登校を終える、8時近くまで交通整理をするのが日課で、もう9年がたちました。

「おかげさまで、事故はありません。子供の顔を見るだけで、機嫌もわかるようになりました。緊張して頭も使う、この朝の1時間が、自分にとっての健康法だと思っています」。

＝初めまして!! 市民一年生です＝

富士のやぶきた茶に軍配
富士の方がおいしいです ほんと。

新茶が出回っています。折しも、お茶の名産の地宇治市から、水上雄士さんご一家（松本）が転勤してこられました。宇治茶対富士のやぶきた茶の対決。まずは、こんな質問から――。

――お茶はどっちがおいしい

雄士さん「お茶は、富士の方がおいしいです。ほんと。宇治茶はくせはないですけれど、つかみどころがないっていうのか。水もまずくて、初めは、飲めなかったですよ」

――宇治市はどんな街

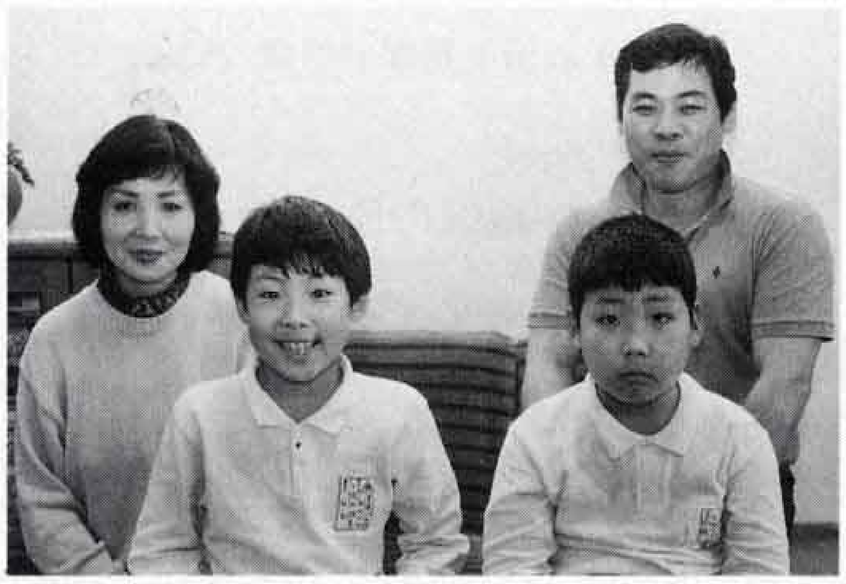
雄士さん「お寺が多くて、のんびりした街。平等院にも近くて、京都駅には電車で十五分くらいの距離。観光地ですから、日曜日は車のラッシュ。それに、物価は高いし魚はまずいし。言葉も、やさしいようだけれど、言ってること自体は相当きついですよ。（苦笑しながら）何だか悪口ばっかりだな」

恵美子さん「お父さんは、向こうでいい思い出ってなかったのよね。ちょっと封建的な人間関係で、苦労したみたい。向島ニュウタウンて団地に住んでたんですけれど、みんな転勤族ばかりで、私と子供たちは友達も大勢できて、楽しかったわ」

――富士の暮らしはいかがですか

恵美子さん「私たちはそれほどでもないんですけれど、子供がにおいがするって言いますね。においは、富士市のトレードマークかしら。それに、学校が遠いのにはびっくり。岩松北小が近いのに、四十五分もかかる富士第一小まで通うんです。緑道があるから少しは安心ですけれど、交通事故が心配です。学区があるのはわかりますけど、何とかならないかしら」

――ありがとうございました



△雄基君（左）と雄哉くんも一緒に

ひと

蛍の人工飼育にかける
「富士ほたる愛好会」の会長

遠藤矢一（えんどうやいち）さん

（吉原3・60歳）

人工飼育の蛍。

愛鷹山麓のすそ野に広がる桑崎。ここで農産物研究所の看板を掲げ、無農薬茶の栽培などをしながら、ゲンジボタルを育てている「富士ほたる愛好会」の初代会長遠藤矢一さん。

ジーパンに合うブルーの綿シャツに、真っ赤なチョッキ。どこか、土と生きる陶工の雰囲気。

「川は、水が流れる場所から、水を流す場所に変わってしまった。蛍の繁殖は、決して難しいことではないけれど、今のままでは無理。しばらくの間は、人間が手伝ってやらないと」。わき水を引き込んだ人工のせせらぎ。蛍のえさ、カワニナの育つ環境です。

森の蛍。

愛好会の当面の活動は、五月の蛍募金運動。六月には、桑崎の蛍を中央公園に放つ蛍祭り。しかし、ことしは水温の低い時期もあったから、蛍が少ないのではと心配しています。

一匹のゲンジボタルが産む卵は、大体五百個。ほとんどが幼虫になり川に入ります。カワニナを食べサナギになるのですが、この時の水温が大きく関係し、サナギになるのは一割くらいだろうと、遠藤さんはにらんでいます。「課題は水温の管理だ」と。

六月、羽化した蛍が、桑崎浅間神社のこずえにとまります。「蛍は、森の中で見るのが一番きれいだ」と遠藤さん。ここは、ライトもネオンもありません。幻想的な蛍の光が、眠っている童心を揺り起こしてくれるかもしれません。